

## 山川の流れが水車の動力

里草会顧問 福井正樹

村の中心を流れ下る川筋に、上と中と下に3つの水車があった。上と中は似たような粗末なものだが、下の水車は個人の所有で本格的な製粉をしていた。うちは中の水車を使用していたが、どのような共同体になっていたのか詳しくは知らない。月に何回か水車の使用できる日が回ってきて、その時に一昼夜使用していたのだと思う。

村のすべての人が水車の組に入っていたのではないと思うが、中には二軒で一軒分の使い方をしている人も居たようだ。子供心にあまり関心もなかった。水車利用組のようなものが形成されていて、関係する費用を負担し利用権を得たのだろう。

川は、春の急激な温度上昇と陽射しで山の雪が融けるとときには、恐ろしいほどの水が岩を噛み、飛沫をあげ、轟くような音を響かせながら、溢れるほど流れる。一方麦を刈り取った後畝を崩し水田に皆が水を引く時には、それぞれの堰で支流に目一杯の水を取られてしまうので、本流は涸れることはないが水の流れは細くなり、いつもは濡れている川岸の石が露出している時もある。

水の豊富な時は集水溝を狭くし、更に水車に導水している途中でも川に水を落として、水車のまわる速度を調節していた。祖母は夜水車小屋で穀物などを回収する時は、私に提灯持ちをさせた。水車からは太い車軸が小屋の中にとおっており、その軸に4本の腕木が位置と角度をあけて取り付けられている。その腕木が立っている柱のような杵の出っ張りの懸ると、杵を持ち上げる。腕木は軸と共に廻って円を描いているので、ある程度の高さまで杵を持ち上げると外れて杵は落下する。

杵の落ちる臼のところは、深めの壺のような穴になっている。そこに入っている玄米などを搗いて糠を削ってゆく。ソバを搗いてソバの殻と蕎麦粉にする場合もある。麻を打たせることもできると聞いたが実際にやっているのは知らない。水車の回転を調節したりしても一晩中置いたのでは搗け過ぎるような時、寝る前に私に提灯持ちをさせて、臼の中のものを回収する。

水車小屋には狭い急斜面を下り簡単な引き戸があるだけだ。電燈はないし、臼の中のものをきれいに回収するには傍で明かりをかざしてもらわないと深いところが見えない。祖母は止めようとする杵を高く持ち上げて、天井から下がっている輪に引っ掛ける。すると腕木が杵に触らなくなって空転するので、臼の中のものを袋などに取り出すのである。

精米する時には、石粉と言う茶碗などを磨くのに使う粉のようなものを添加していたように思うが、どうだったのだろう。今のコイン精米と同じように、玄米を精米するわけだが、水車の場合は熱を持たないので米が美味しい。私もコイン精米を利用するが、相当高い温度になり、持って帰ってすぐ広げて熱を取るようになっている。

伯母の家には足ふみの臼と杵があった。シーソーのようにになっている杵の反対側に体重をかけて杵を持ち上げ、ストーンと落とす。学校から帰ったら何十回か何百回か踏まされた

と従兄は言っていた。私は水車のおかげで臼踏みは経験したことはない。

ソバも石臼を挽くのは手伝わされたものの、ひとまず水車で蕎麦殻とソバの実を砕いて篩い分けてあるので、だいぶ楽なはずである。今考えてみると、村の水車はただ流れ下っている川の高低差を利用して水車を回し、それを動力に変えて利用する長い歴史を経た先祖の知恵だと思う。

村の一番下の水車は個人の事業で、麦などの製粉も請け負っていたようだ。ほかの二つの水車より特別大きな水車が廻っており、歯車などが組み合わされて大きな臼が横回転されていた。同級生のお姉さんが臼のそばに座って本などを読みながら製粉の具合を見ていた。この水車小屋は他の二つより広く強固で、電気も引かれていた。事業としてどのようになっていたかは知らないが、雨が降り出した時など子供仲間と押しかけて行って、その小屋の中で遊んでいた。

ある時私の服の端がゆっくり回っている木の歯車に引っかかり、なぜだかわからずに強い力で引っ張られていった。お姉さんが飛びついてその服を歯車から外してくれたのでその力から解放された。そのまま引き込まれていたら死んでしまうところだったらしい。過去にも一人亡くなっているのだそうだ。私はその時は恐ろしいと感じなかったが、後で死ぬところだったと聞いて、改めてそんな危機に直面していたことを知った。しかしだからと言って小屋の中で遊んではいけないと言われたこともなかった。

もう50年ほど前の話になるが、群馬と長野県堺の碓氷峠の山中にある霧積温泉に泊まった。群馬の青年たちの集会がこの温泉で開かれ私は翌朝の講義をする予定だ。私は列車の都合で午後2時ごろに国鉄の横川に着き、迎えに来てもらう事になっていた。ところが待っても待っても迎えが来ない。駅や郵便局でいろいろ聞くと、電話も電線もないということだ。知らない者が山道をたどってたどり着くのは無理だろうと言う。何か方法はないかという、郵便局の人も困って、電報を打つと配達の人が行くから、それについて行ったらどうだろうという話になった。そんな時忘れていた担当者が血相変えて飛び込んできて、事なきを得た。駐車場から小山を越した谷に宿があり、夕食が終わったころジーゼル発電が止まり静かになると、やっと顔が判る程度の明るさの水車の発電に替わる。

水車から連想するものに、芋車がある。六角形の羽の付いた箱に軸が通っている。これを川の流りに置くと、羽に水流が当たってのんびりと回転する。箱の一面が開くようになっていて、里芋を入れてしっかりふたをしておく。回っているうちに芋どうしが混ぜ合わされ擦りあって皮が削られてゆく。箱には隙間があり水は自由に中も流れるので、こすり落とされた芋の皮は流れ去ってしまう。

伯母の家の下の川は川幅が広いので、岸近くに石で適当な幅の流れを作りこの芋車を架け渡していた。一晩もすると真っ白に削れた里芋ができる。私たちが芋煮をする時、里芋の皮むきにてこずるが、こんな芋車があると助かるだろう。聞いた話では渦巻き型の古い洗濯機に里芋を入れて回すと、きれいになるということだ。流れ下っている水流の力を、過疎化してゆく山里でもうまく利用できないものだろうか。